

保育園安全だより

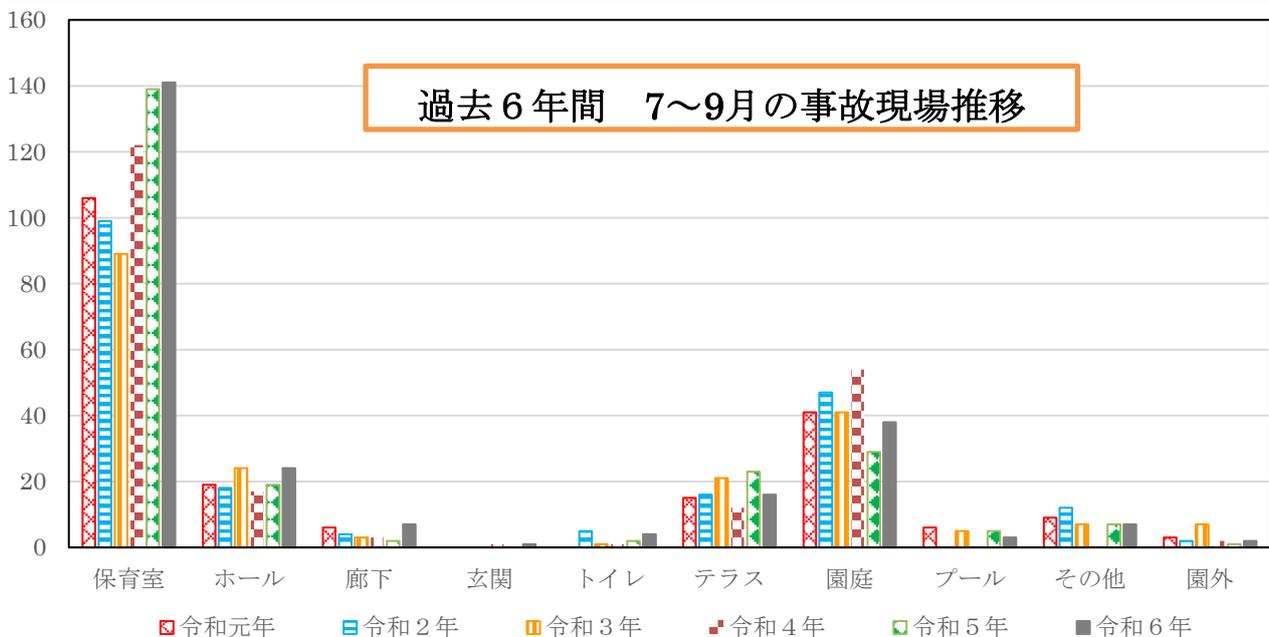
—事故報告より—

令和 6年 7月～9月



今年は短い梅雨が明けるとともに猛暑となり、子どもたちの健康管理にも気遣う日が続きました。今回の安全だよりでは、7～9月に発生した各園の事故総数243件について報告します。件数としては4～6月までの240件と差はないのですが、怪我をした場所は猛暑も関係してか、以前に比べ屋内が多くなっています。

令和6年度 事故報告書集計（7～9月）												
	園内								園外			
	保育室	ホール	廊下	玄関	トイレ	テラス	園庭	その他	道路	公園	その他	計
0歳児	12	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	13
1歳児	57	5	0	0	1	8	2	5	0	0	0	78
2歳児	33	5	3	0	1	5	9	0	0	0	0	56
3歳児	17	6	3	1	0	2	5	0	0	0	0	34
4歳児	13	0	0	0	1	0	5	2	0	1	0	22
5歳児	9	8	1	0	1	1	17	2	0	1	0	40
合計	141	24	7	1	4	16	38	10	0	2	0	243



【6年間の事故の推移について】

- 令和2年から4年頃まではコロナの影響もあり、密を避けるために園庭（外遊び）で遊ぶことが多かったのか、園庭での事故件数の割合が多くなっていました。
- 令和5年以降はコロナ5類への移行や猛暑への配慮が重なり、室内での事故件数が増える傾向があります。
- その他の場所は、事務所・受託室・階段・調理室前で、いずれも室内の事故でしたが、大きく件数に差は見られませんでした。

【今回の事故報告で多くあげられた内容】

- ① 引き継ぎ中で、子どもから目を離してしまった中での怪我。側に大人はいましたが、他クラスからのサポート職員（会計年度任用職員含む）で、ついてほしい場所は伝えたが、配慮が必要な児への対応は伝えていなかったため、怪我へと繋がってしまいました。
- ② 爪が長かったために、自分で顔などこすったときに擦過傷になってしまい、また、他児とのトラブルで怪我に繋がってしまいました。
- ③ 乳児クラスは前回の保育安全だよりでも記載した、バランスを崩して顔面を打ち、上唇小帯裂傷など口の怪我が多く報告されていました。



【解決策と課題】

- ① 職員体制や引継ぎも重要ですが、それにより事故が起こらないよう、情報を短時間で伝える方法の工夫や、どんな場面でも子どもの様子が見えるようにする、などの対応が必要です。
- ② 今回は手の爪だけではなく、足の爪の事故も報告されています。週明けなどに手の爪の確認をしていると思いますが、身体測定の際や着替え時等に足の爪の状況も確認できていると、その爪の怪我がいつ（園なのか自宅なのかも含め）起きたのか、保護者と共有することもできます。
- ③ 乳児の怪我については、個々の成長発達にあった遊びの場を整える、そのスペースにあった人数と職員配置にする、何かの時にはすぐにフォローしあえるような環境を整えるなど、クラスだけではなく園全体で子どもの成長発達を共有し、いつでもサポートできる体制を解決策としてあげる報告が多くありました。

近年猛暑で外に出られない事が多く、それに伴い室内での怪我が増加傾向にあるので、夏場の室内遊びの安全と充実が課題になってきています。

この夏に室内保育で感じた危険な場所や内容を園全体で共有し、来年度以降の夏の安全な保育につなげましょう。



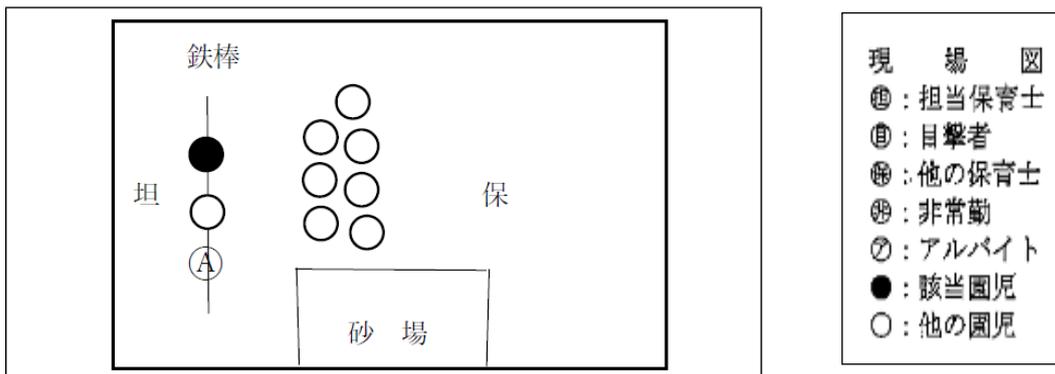
【鉄棒の遊ばせ方】

【事例1】5歳児 発生時間 11時00分

《発生状況》

鉄棒を5歳児3名が行なっていた。該当園児は前回りや逆上がりをやっていたが、できる喜びから楽しそうに笑ったり、回る際に手を持ち替えるなど一瞬手を離すようなこともあった。その都度声をかけながら該当園児が安全にできるよう、また何があってもすぐに援助できるように側についていた。同時にAの順番になり、Aが鉄棒で前回りを始めるが、不安定で回るのをためらう様子があったので、Aの補助をした。その時に該当児が前回りでバランスを崩し、支柱に後頭部をぶつけてしまった。

《現場図》



《原因・問題点》

危険を感じながらも、Aの対応に気をとられて該当児から目を離してしまった。進級して気持ちが大きくなっている様子があり、落ち着いて行う・手はしっかりと鉄棒を握るなどを繰り返し伝えてはいたが、行動に移すのが難しかった。

《その後の改善策》

援助が必要だと感じた園児が同時に鉄棒を行うことになった際は、一方に待ってもらい・組み合わせを変える、などの配慮をする。進級し担任も変わり、子どもの動きを予想しながら鉄棒の安全な遊び方について、子どもたちに話し確認し見守る。

特に好きな遊びは自分の力を過信してしまうということを念頭に置き、危険を感じたときにはすぐに援助できるようにしていく。

この事例は園庭にある鉄棒で起きた事故です。年長児3人が並んで鉄棒をしていました。

- ・既存の鉄棒は何人の子どもであれば安全に遊ぶことができるか
 - ・1名の保育士が一度に補助することができる子どもの人数は何人か
- 事故の検証をしっかりと行い、職員間で周知しましょう。

今回の事例のように個々の状況は違います。他の事件事例で、保育士が「待ってね。」と声をかけて他児の対応に向かっている際に、子どもが待ちきれずに鉄棒で遊びだし、転倒したケースがありました。職員はどう連携し注意していくのか等を、今一度検証していきましょう。

(以前にも同じような状況で事故が起きていました。)



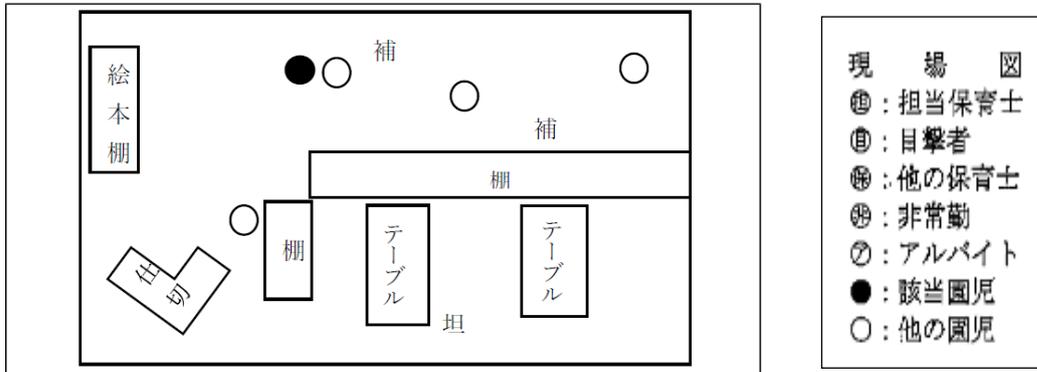
【職員の的確な判断】

【事例2】 1歳児 発生時間 10時55分

《発生状況》

担任の保育士が食事の配膳をしており、園児5名を補助員（非常勤）2名で保育していた。補助員が該当園児の顔を見て右頬の傷に気づき、その現場は誰も見ていないという状況だった。後からクラウドカメラで状況を確認したところ、該当園児に他の園児が覆いかぶさるようにしている様子があり、その際に引っ掻いた可能性が考えられる。

《現場図》



《原因・問題点》

- ・子ども5人に対して補助員2名はいたものの、1名は身の回りの片づけをしており、一人ひとりの子どもの様子を十分把握をしていなかった。
- ・担当保育士は、子どもたちが食前で気持ちが落ち着かない状況であることを補助員に伝え、保育を引き継ぐべきだった。

《その後の改善策》

- ・一人ひとりの子どもたちの動きを十分把握をしながら保育する。
- ・補助員（非常勤）に保育をお願いするときには、その日の子どもの様子や状況などを考慮して、どのようなことに気を付けて保育をしたらいいのかを伝えるようにする。

日中の遊びの時間から昼食の準備へ移行する時間帯は特に、子どもたちの気持ちが様々な方向に向き、それに伴った行動が予測されます。保育士は子どもたち一人ひとりの思いと行動を把握していくことがより重要な時間帯でもあります。

この事例は目撃者が無い中で怪我が起こっています。給食の提供においては、アレルギー児への対応等を含め誰が携わっても安全に配膳ができるように、一目でわかる表などを作成し確認できる場所に貼っておく。又、クラス担任は子どもたちから目を離さずに子どもたちの様子と職員間の動きを的確に判断し、他職員や補助員（非常勤）に指示が出せるようにしていくことが大切です。

その他どのようなことを心がければリスクの軽減に繋げることができるかを各クラスで検証してみましょう。



【窒息の危険（食事編）】

【事例3】2歳児 発生時間 15時35分

《発生状況》

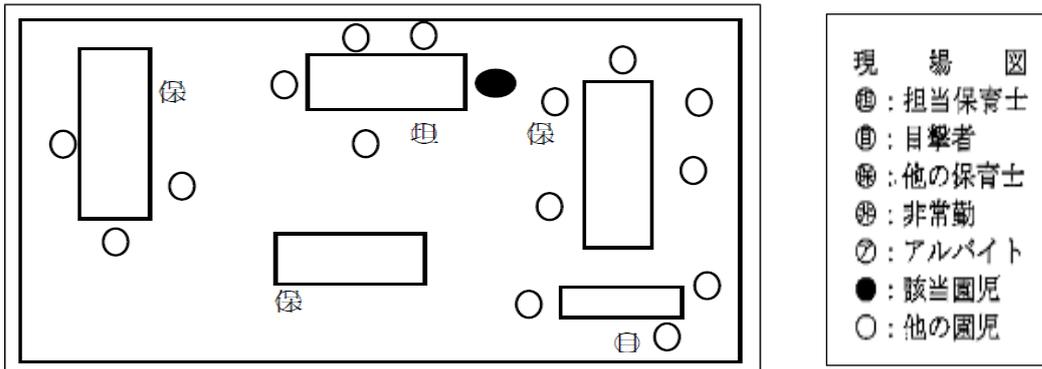
当日のおやつはカステラであった。

該当園児は定量を食べ終え、もう一切れおかわりをして食べていた。

担当保育士は、他児のおかわりを入れているところで、該当園児からは目が離れていた。目撃保育士が該当園児の異変に気づき、「〇〇くん、詰まってる？」と声をかける。該当園児は立ち上がり、苦しそうに顔をゆがめ、息ができない状況であった。

担当保育士が背中を強く10回ほど叩くが、すぐには息ができない状況であった。更に数回叩くと、飲み込むことができ泣いた。

《現場図》



《原因・問題点》

カステラという詰まりやすい食材であったが、食物アレルギーの誤食防止の気持ちが強く、気を付けて食べさせるという意識が薄かった。該当園児は詰め込むように食べる姿は少なく、また定量はゆっくり食べていた様子から、おかわりも大丈夫だろうと無意識に思っていた。(昨年度はパンを詰め込む姿があり注意していたが、そのことに対する意識が薄かった)

《その後の改善策》

- ① カステラやパンは詰まりやすい食材であるということを職員間で共有し、食べている時は目を離さないようにし、ゆっくり嚙んで食べることや適宜に水分とることも伝える。
- ② 該当園児が苦しそうにしていた時、咄嗟に牛乳を飲ませようとしてしまった。応急措置についても改めて確認する。
- ③ 該当園児は昨年度詰め込む姿が多く注意していたが、そのことに対する意識が薄かった。また該当園児だけでなく、食べ方に注意が必要な児についても職員間で共有した。

食材がのどにつまり、窒息状態をまねいてしまった重大な事案でした。日頃からよく提供されるメニューなどは、慣れているから大丈夫だろうという思いから、子どもの食べている姿から目が離れやすくなりがちです。どのような時でも、職員がその形態を把握し、安全に食べられるような声掛けと見守ることが重要です。

また、応急処置方法も職員間で再度確認し、事故防止につなげていきましょう。

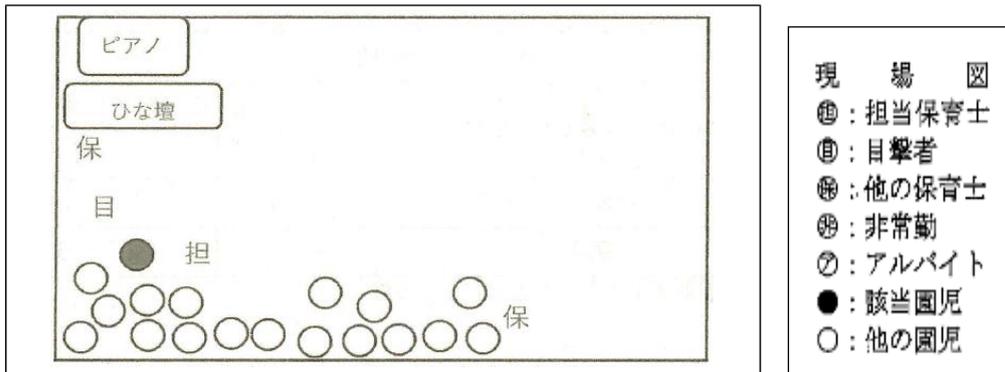
【事例4】 三角巾を使った肘内障の応急処置

[診断名] 肘内障

[発生日時] 令和6年6月21日(火) 9時30分

[クラス・性別] 2歳児クラス (女児)

[現場図]



[事故発生状況]

園児 18 名、ホールへ行き、リズム遊びをしていた。目撃者はピアノを弾き、担当保育士はリズム遊びの手本となりながら、子どもたちの安全に配慮し保育にあたる。リズム遊びではカメ、ウサギ、2人組で散歩、キラキラ星(横になって寝転ぶ動作)をしていたが、痛がる様子にはなかった。

会計年度任用職員が水分補給の準備を終えたところで、担当保育士は子どもたちに一旦壁際に集まってお茶を飲もうと声を掛ける。目撃者は立っていた該当園児にお茶のコップを渡したが、受け取らずに左腕を抑え、痛みを訴えたことに気が付く。該当園児は以前、右腕の肘内障になっていたため、すぐに看護師にみてもらう。応急処置を行う。

[応急救護処置の内容]

園長、副園長、看護師は左腕の動作確認をしたところ、痛みを訴える様子や右手で左腕を保持する姿があり、三角巾で左腕を応急処置をした。



[事故原因・問題点]

いつ抜けたのか定かではなく、該当園児が腕が抜けやすいという認識はあったが、それに応じた配慮がたりなかった。

[その後の改善策]

- ① 腕が抜けやすいことを全職員に周知し、そのことを踏まえ保育にあたる。
- ② しばらくの間、腕に衝撃が加わるような活動は控える。
- ③ 散歩に出かける時や手を繋ぐときに、運動遊びの時は細心の注意を払う。

[園長意見]

保護者より肘内障について、家庭で以前なったことがあるとお知らせをいただいていたのですがすぐに気づいた。しかし、今回明確に何が原因になったのかわからないのは反省である。

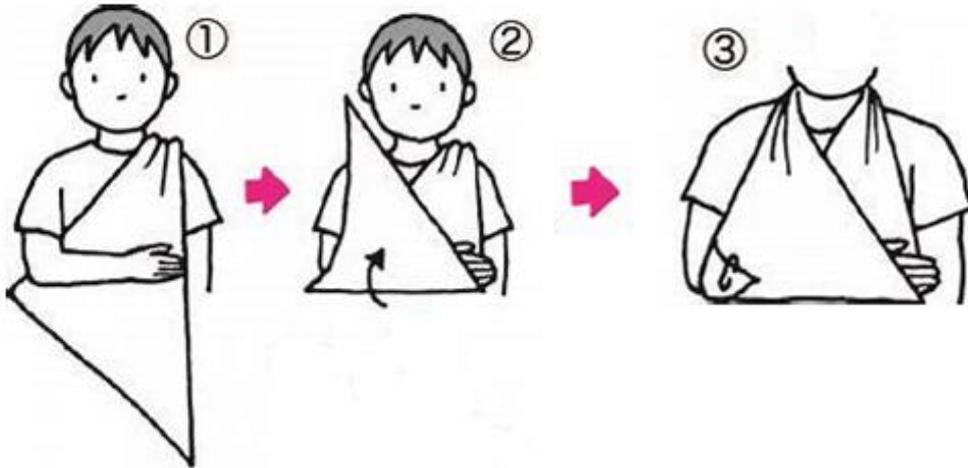
クラスでは今回の前に肘内障になったお子さんがいたので、任用職員や正規職員に肘内障についての注意を周知したところだった。今回は、保護者へも肘内障についてのお知らせを作成して周知をした。引き続き十分な配慮をして保育にあたっていく。

～看護師のコメント～

今回、肘内障の事例が多くあがっていました。その中で応急処置の際に三角巾を使用しているのは1件でした。三角巾で固定をすることにより患部が安定します。この事例のように、子どもの様子を十分に確認し、三角巾の使用を検討しましょう。

骨折や脱臼の時の三角巾の使い方

- ・肘や三角巾の頂点が来るように当てて、両端は首の後ろで結び、肩から吊ります



保健マニュアルより抜粋

□肘内障

子どもの手を急に引っ張ったりしたときに、肘の細かい靭帯がずれる状態である2歳から4歳くらいの子どもの多くみられる。繰り返しおこすことがあるので既往を把握しておく

発生状況：子どもの腕を強く引っ張ったり、寝返りや転んだ時に腕を身体の下にした時などに起こる

症状：肘や手首を痛がり、腕をだらりと下げ、自ら動かさない

発生時の対応

- ① 腕をぶらぶらさせないよう、痛くないように、三角巾などで固定する
- ② 整形外科を受診する



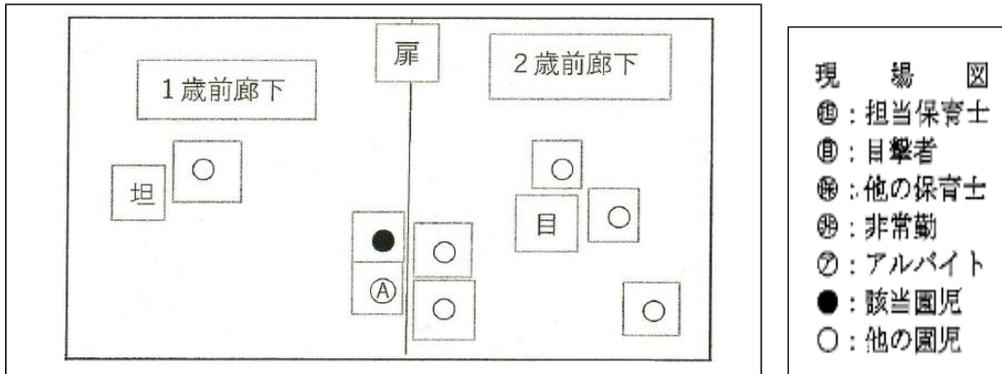
【事例5】咬傷の処置

[診断名] 右腕咬傷

[発生日時] 令和6年5月15日(水) 12時10分頃

[クラス・性別] 1歳児クラス(男児)

[現場図]



[事故発生状況]

昼食後、廊下で保育士と一緒にブロックを使って遊んでいた。遊んでいる途中に、ブロックから離れ歩く様子があった。1歳児クラスと2歳児クラスの間にある格子状の扉で反対側から2歳児がのぞいており、該当園児と園児Aが見に行き近づいた。該当園児と園児Aの距離が近かった。そこで、該当園児の右腕に噛みつき皮が剥け内出血ができませんでした。午睡後再度確認すると出血があったため受診することになる。

[応急救護処置の内容]

皮がむけており、噛みつきであったため、傷を洗い流し、滅菌ガーゼを当て冷やしタオルで冷やす。

[事故原因・問題点]

園児Aは、気持ちを言葉にするのが難しく、思い通りにいかなかったり自分の遊んでいるものを触れられそうになると噛みつきやすいところが以前からあった。そのA児が至近距離で該当園児と並んだ時に、また噛みつきが起こるかもしれないということを予測して、より近くで遊びを見守る必要があった。園児たちが扉をたたき始めた時点で何かが起こるかもしれない可能性を想定し、動きや子ども同士の距離感を注視する必要があった。

[その後の改善策]

- ・園児の性格を踏まえ、他児の動きや子ども同士の距離感を注視する。
- ・思い通りにいかなかったときや自分の遊んでいるものを触れられそうになったときの気持ちを受け止め、代弁していく。
- ・常に事故や怪我へ予測を行い、それぞれの子どもの位置に目を向け、すぐに動ける体制をとる。



[園長意見]

- ・園児Aは噛みつきが続いており、気を付けてみていくことを確認していたが今回他児との距離が近かったにも関わらず、保育士の行動予測ができておらず噛みつきが起きてしまった。園児Aの気持ちを受け止め代弁していくとともに、子どもの行動を予測し防ぐことを確認した。

～看護師のコメント～

右腕を噛まれてしまい、その際に適切な処置が行われた事例です。傷を洗い流し、滅菌ガーゼを当て、その上から冷やしたタオルで冷却しました。

傷がある場合は、直接冷やしたタオルを当てるのではなく、清潔なガーゼで保護する必要があります。

傷がある場合の処置方法は

- ①流水であらう
- ②清潔なガーゼを当てる
- ③必要に応じて冷却する

冷やしたタオルによる冷却の目的は、痛みの緩和や炎症による腫れをおさえることです。冷やし過ぎると血流が悪くなってしまったり、痛みが増してしまったりすることもあるので、冷やし過ぎには十分に注意をしましょう。

